

新約聖書「第一コリント書」

井田 泉（日本聖公会奈良基督教会）

コリントは、パウロの手紙が書かれた当時、ギリシアの大都会でした。自由人と奴隷合わせて70～80万人の人口があったとも言われます。交通の要衝であり、また交易と通商によって栄えていました。豊饒の女神アフロディテ、医学と癒しの神アスクレピオス、太陽神アポロなどを崇拝する宗教が盛んでした。同時に、ユダヤ人も多数住んでいて、土曜日には会堂礼拝が行われていました。

パウロは第2回の宣教旅行のときにコリント教会の基礎を築きました（使徒言行録18:1-18）。彼が離れた後、コリント教会は大きく発展しましたが、しかし放置できない問題が多数生じていることがパウロに伝わってきました。富める者、力ある者たちの横暴と貧しい人たちの疎外（コリントー11:22）、教会内の不和と分裂、生活の墮落、礼拝の混乱（12:3、14:33）、福音の歪曲といった問題がはなは



だしくなっているというのです。パウロはこれを心配し、あるべき信仰と生活を回復させるために、情熱をこめて数度にわたって手紙を書きました。「ローマの信徒への手紙」とは異なり、この書簡にはパウロの感情が繰り返し前面に出てきます（例えば4:8-21）。言い換えれば、パウロはやむにやまれぬ思いで、気持ちを何度も高ぶらせながら、しかし祈りつつこの手紙を書いたのです。

パウロのコリント滞在は紀元50年頃で期間は約1年半、このコリント第一書は54年頃エフェソで書かれただろうと言われています。

1. 「使徒言行録」に記されたパウロのコリント宣教

使徒言行録（18:1-18）に記されているパウロのコリントでの活動を少し見ておきましょう。パウロはアテネを去って西のコリントに行きました。ここで彼は、ローマを退去させられてコリントにやってきたアキラとプリスキラ（プリスカ）というクリスチャン夫妻と出会いました。パウロはテント造りを仕事としており、この夫妻も同じ仕事であったこともあって、パウロは二人の家に住み込んで一緒に仕事をするようになりました。この夫妻のことはこの手紙の終わりのほうに出て来ます（16:19）。

パウロは土曜日の安息日ごとに、ユダヤ教の会堂でイエスが救い主（キリスト）であることを熱心に論じました。しかしこの書簡によれば、彼はコリントでの活動を始めたとき、元気に溢れていたわけではありません。まったく正反対であったということです。

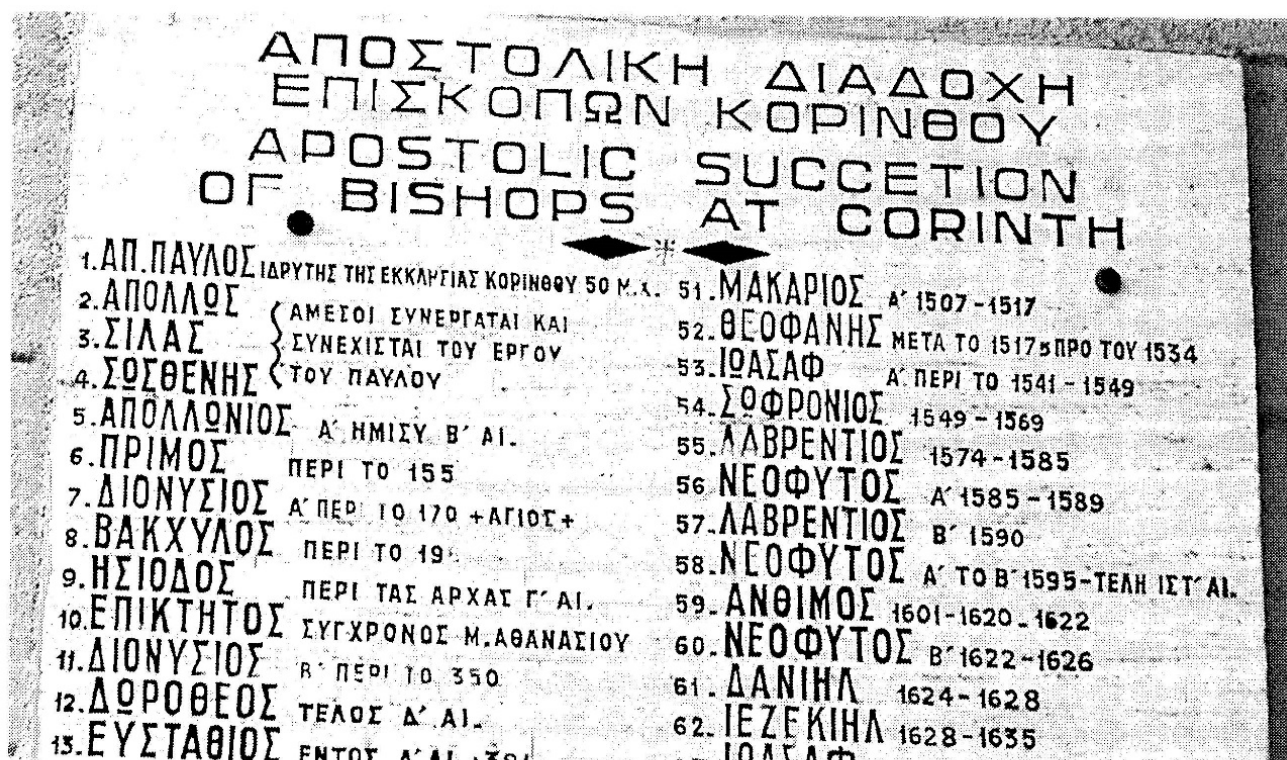
「2:3 そちらに行ったとき、わたしは衰弱していて、恐れに取りつかれ、ひどく不安でした。4 わたしの言葉もわたしの宣教も、知恵にあふれた言葉によらず、“霊”と力の証明によるものでした。」

パウロはコリントで激しい抵抗に遭いましたが、やがて会堂長クリスポとその家族が、一家をあげて主イエスを信じるようになりました。ほかにも多くの人々がパウロの言葉を聞いて洗礼を受けました。しかし迫害の激しさや多くの困難に直面して、パウロは意気消沈することがありました。彼はイエスの名を呼び、切に助けを求めたに違いありません。使徒言行録にはこう書かれています。

「18:9 ある夜のこと、主は幻の中でパウロにこう言われた。『恐れるな。語り続けよ。黙っているな。10 わたしがあなたと共にいる。だから、あなたを襲って危害を加える者はない。この町には、わたしの民が大勢いるからだ。』」

あるときユダヤ人たちの集団がパウロを襲い、捕らえてコリントの法廷に引き立てて行き、パウロの罪を訴えました。しかしアカイア州の総督ガリオンはこれを取り上げようとしませんでした。怒った群衆は、ソステネという会堂長を捕まえて殴りつけました。先ほど、クリスポが会堂長であったことが書かれていましたが、ソステネは同僚の会堂長なのか、クリスポの後任なのかわかりません。このソステネの名前が、コリント第一書の冒頭に出て来ます。

「1:1 神の御心によって召されてキリスト・イエスの使徒となったパウロと、兄弟ソステネから、……」 殴られた会堂長ソステネと同一人物であるかどうかはわかりませんが、もし同一



現在のコリント教会入口の「歴代監督表」。2行目にアポロの名前がある。

人物であるなら、彼もイエスを信じる者となり、パウロの同労者となり、差し出し人に名前を連ねたこととなります。。

写真をご覧ください。現在のコリント教会の入口にあるコリントの監督（主教）歴代表です（立教大学キリスト教学会『キリスト教学』第 51 号、2009 所収の佐藤研氏の論文「アポロ伝承小史」から拝借したもの）。標題は、聖公会風に訳せば、「コリントの主教の使徒的継承」です。初代が使徒パウロ、第 2 代がアポロ、第 3 代がシラス、そして第 4 代がソステネとなっています。

2. 第一の手紙の挨拶

「1:2 コリントにある神の教会へ、すなわち、至るところでわたしたちの主イエス・キリストの名を呼び求めているすべての人と共に、キリスト・イエスによって聖なる者とされた人々、召されて聖なる者とされた人々へ。イエス・キリストは、この人たちとわたしたちの主であります。」

「コリントにある神の教会へ」。教会は現実には人間の集まりであり、さまざまな葛藤や問題が生じます。とりわけコリント教会はそれが深刻でした。しかし教会は本来神さまのもの、神によって集められ、共に神と出会う場所です。「神の教会」という言葉に、パウロの思いが込められています。コリントの教会の人びとは、このことを忘れていたのではないのでしょうか。

「わたしたちの主イエス・キリストの名を呼び求めているすべての人」。

かつてパウロはコリントにおいて、困難と危険の中から主の名を呼び求めました。それに対して先ほど読んだとおり、主は幻の中でパウロに言われました。「恐れるな。語り続けよ。黙っているな。わたしがあなたと共にいる」。「主の名を呼び求める」というのは、単なる挨拶の言葉ではなく、パウロにとってもコリントの人々にとっても、今もこれからも切実な、現実的なことなのです。思えばパウロの回心と新しい生涯は、主イエスから「サウル、サウル」と呼ばれたことによって、そして彼のほうからもイエスの名を呼ぶことによって始まったのでした。

「1:3 わたしたちの父である神と主イエス・キリストからの恵みと平和が、あなたがたにあるように。」

この冒頭の挨拶のわずか 3 節の中に「イエス・キリスト」ないし「キリスト・イエス」という言葉が、新共同訳では 5 回繰り返されています。ギリシア語原典で数えても 4 回ありました。この繰り返しのうちに、パウロのすべての思いの中心がイエス・キリストであることが感じられます。コリントの会堂でパウロが熱心に語ったのは、イエスこそが救い主（メシア＝キリスト）である（18:5）、ということでした。

あらゆる彼の手紙がそうであるように、この手紙もまた、祈りで始まり祈りで閉じられます。

3. 成長させてくださる神

パウロが非常に心配しているコリント教会の問題の一つは、教会内の不和、争いです。手紙の冒頭の挨拶、祈り、感謝を終えると、彼は直ちにこのことについて語り始めます。

「1:10 さて、兄弟たち、わたしたちの主イエス・キリストの名によってあなたがたに勧告します。皆、勝手なことを言わず、仲たがいせず、心を一つにし思いを一つにして、固く結び合いなさい。11 わたしの兄弟たち、実はあなたがたの間に争いがあると、クロエの家の人たちから知らされました。12 あなたがたはめいめい、『わたしはパウロにつく』『わたしはアポロに』『わたしはケファに』『わたしはキリストに』などと言い合っているとのこと。13 キリストは幾つにも分けられてしまったのですか。パウロがあなたがたのために十字架につけられたのですか。あなたがたはパウロの名によって洗礼を受けたのですか。」

「ケファ」というのはペテロのことです。コリントの教会内にはっきりした「パウロ党」とか「アポロ派」といった党派があったとは必ずしも考えられません。しかし力を振るおうとする人、教会内で影響力を持とうとする人たちが、それぞれパウロ、アポロ、ケファなどの名前を担いで自分の正当性を主張して争っている、という嘆かわしい事態が生じていたのです。

ギリシア語原典を見ると、「わたしはパウロに」「自分はアポロに」「わたしはケファに」……は、**ἐγώ**「エゴー」「エゴー」「エゴー」、「わたしは」「わたしは」「わたしは」……という一人称単数主格の代名詞が強い響きを持って連続しています。この強い「エゴー」の陰に、キリストは霞んでしまっているかのようです。霞んでいるどころか、そのような分裂の争いによって、「キリストは幾つにも分けられてしまったのですか」、あなたがたはキリストの体をばらばらに分断してしまっているではないか、とパウロは言うのです。

ここからパウロは、イエス・キリストの十字架に人々の関心を向けさせようとしています。救いはここにしかない。

「1:22 ユダヤ人はしるしを求め、ギリシア人は知恵を探しますが、23 わたしたちは、十字架につけられたキリストを宣べ伝えています。」

キリストは低くなられ、十字架の上に体を裂かれ、血を流して死なれたのに、どうしてあなたがたは高くなろうとし、自分を頼みとし、自分と自分の力を誇ろうとするのか。

「1:27 神は知恵ある者に恥をかかせるため、世の無学な者を選び、力ある者に恥をかかせるため、世の無力な者を選ばれました。28 また、神は地位のある者を無力な者とするため、世の無に等しい者、身分の卑しい者や見下げられている者を選ばれたのです。29 それは、だれ一人、神の前で誇ることがないようにするためです。……31『誇る者は主を誇れ』と書いてあるとおりになるためです。」

そもそもパウロとアポロとケファは仲違いしている訳ではありません。協力者どうしなのです。

「3:5 アポロとは何者か。また、パウロとは何者か。この二人は、あなたがたを信仰に導くためにそれぞれ主がお与えになった分に応じて仕えた者です。6 わたしは植え、アポロは水を注いだ。しかし、成長させてくださったのは神です。7 ですから、大切なのは、植える者でも水を注ぐ者でもなく、成長させてくださる神です。」

6節の「わたしは植え、アポロは水を注いだ」は植物、あるいは野菜か果物を育てる譬えですが、「水を注いだ」と訳されているのは **ποτίζω**（ポティゾー）という言葉で、「水を飲ませる」と

いうニュアンスがあります。パウロの「植える」働きも、アポロの「水を注ぐ＝飲ませる」働きも、愛情をこめて、心をつににしてなした働きです。しかも「成長させてくださった」、あなたがたを、コリントの教会を成長させてくださったのは、神さまご自身なのです。

「3:16 あなたがたは、自分が神の神殿であり、神の霊が自分たちの内に住んでいることを知らないのですか。17 神の神殿を壊す者がいれば、神はその人を滅ぼされるでしょう。神の神殿は聖なるものだからです。あなたがたはその神殿なのです。

18 だれも自分を欺いてはなりません。もし、あなたがたのだけれが、自分はこの世で知恵のある者だと考えているなら、本当に知恵のある者となるために愚かな者になりなさい。」

このようにパウロはさらに激しい言葉を用いつつ、コリントの人々を信仰の原点、教会の原点に立ち戻らせようとします。愛を注いで育ててきた教会が不和と分裂に陥っているのは、パウロには耐えがたいことです。

「自分が神の神殿であり、神の霊が自分たちの内に住んでいる」

このことを認識するなら、神への恐れと謙遜が生じるのではないのでしょうか。パウロはそれを祈っています。

ところでこの時期は今のような聖餐式が確立される前のことで、「主の晩餐」と呼ばれる礼拝兼食事が教会生活の中心だったようです。その際、力を持った裕福な人たちが先に集まって食べてしまい、後から来た貧しい人たちが恥ずかしい思いをする、ということが起こっていました。コリント教会内の力争いの陰にこのようなことが生じていることを知ったパウロは、特に裕福な人たちに対して厳しく具体的な勧めをしています。

「11:22 あなたがたは神の教会を見くびり、貧しい人々に恥をかかせようというのですか。」

「11:33 わたしの兄弟たち、……食事のために集まるときには、互いに待ち合わせなさい」

4. 聖霊の賜物

コリントの教会のひとつの特徴は、霊的熱狂、礼拝や集会における感情的高揚でした。神の力、聖霊による強い励ましや促し、感動を経験するのは尊いことです。しかし霊的熱狂には危険なものが潜んでいる場合があります。神によらない人間的興奮や熱狂というのがあるからです。コリントの教会の礼拝は強い高揚、感情の高まりがあり、その中に混乱が起こっていたようです。

「12:3 ここであなたがたに言っておきたい。神の霊によって語る人は、だれも『イエスは神から見捨てられよ』とは言わないし、また、聖霊によらなければ、だれも『イエスは主である』とは言えないのです。」

「イエスは神から見捨てられよ」は、もっとはっきり訳せば「イエスは呪われよ」です。

Ἀνάθεμα Ἰησοῦς (アナテマ・イエスース)

実際にこんなひどい言葉が、コリントの教会の礼拝で飛び交ったかどうかは断言できませんが、これが事実なら、この言葉はパウロの胸に突き刺さったに違いありません。ここまで顕著なことはなくても、祈りの場、聖なる礼拝の空間がまったく異質の声や音によって破壊される、ということはどこでも起こりうることです。

パウロは、人の感情的高揚と聖霊の働きを峻別するように促しています。「イエスは主である」は最も簡潔で中心的なキリスト教の信仰告白です。そのように人の心を開き、認識させ、告白させるのは人間の力ではなく聖霊なのです。

聖霊が「イエスは主である」とわたしたちに理解させ、告白させてくださる。そのとき、イエスとわたしたちの間に命の交流が起こります。わたしたちを愛していてくださるイエスをわたしたちのほうからも新しく愛し、信頼します。わたしが主ではなく、この世界の別のものが主であるのではなく、イエスが主である。わたしたちは謙遜にされ、真心をささげます。謙遜にされたわたしたちにイエスの愛の呼びかけが聞こえてきます。信仰告白とはそういうものでありたい。

「12:4 賜物にはいろいろありますが、それをお与えになるのは同じ霊です。5 務めにはいろいろありますが、それをお与えになるのは同じ主です。6 働きにはいろいろありますが、すべての場合にすべてのことをなさるのは同じ神です。7 一人一人に“霊”の働きが現れるのは、全体の益となるためです。8 ある人には“霊”によって知恵の言葉、ある人には同じ“霊”によって知識の言葉が与えられ、9 ある人にはその同じ“霊”によって信仰、ある人にはこの唯一の“霊”によって病気をいやす力、10 ある人には奇跡を行う力、ある人には預言する力、ある人には霊を見分ける力、ある人には種々の異言を語る力、ある人には異言を解釈する力が与えられています。11 これらすべてのことは、同じ唯一の“霊”の働きであって、“霊”は望むままに、それを一人一人に分け与えてくださるのです。」

こうしてパウロは、それぞれが自分に与えられている霊の賜物に気づき、**全体の益のために**それを謙虚に発揮活用する（ささげる）ようにと願い求めます。それらは「**一つの体**」（12:13,20）である教会を形成するためにこそ、ひとりひとりに与えられたものなのです。

聖霊の多様な賜物について語った後、パウロは「**もっと大きな賜物**」、「**最高の道**」（12:31）を示します。それは「**愛**」です。コリント第一の13章は「**愛の賛歌**」として知られている箇所です。

「13:3 全財産を貧しい人々のために使い尽くそうとも、誇ろうとしてわが身を死に引き渡そうとも、愛がなければ、わたしに何の益もない。4 愛は忍耐強い。愛は情け深い。ねたまない。愛は自慢せず、高ぶらない。5 礼を失せず、自分の利益を求めず、いらだたず、恨みを抱かない。6 不義を喜ばず、真実を喜ぶ。7 すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える。」

正直に言うと、わたしはこの「愛の賛歌」が必ずしも好きではありませんでした。こういう愛は自分にはない。無理なことを強制されているような気がして落ち着かなかったのです。しかしある時期に、これはわたしの愛ではなく、わたしを愛してくださる神の愛、イエス・キリストの愛であることに気づきました。

「13:12 わたしたちは、今は、鏡におぼろに映ったものを見ている。だがそのときには、顔と顔とを合わせて見ることになる。わたしは、今は一部しか知らなくとも、そのときには、はっきり知られているようにはっきり知ることになる。」

昔の鏡はおぼろにしか映らなかった。神のこともイエスのことも自分のことも人のことも、今はおぼろにしかわからないかもしれない。

「だがそのときには、顔と顔を合わせて見ることになる。」

しかし将来、わたしたちは顔と顔を合わせて見る。イエスを見るのです。わたしたちを愛してくださった救い主イエス・キリストと顔と顔を合わせてはつきり出会うのです。

「わたしは、今は一部しか知らなくとも、そのときには、はつきり知られているようにはつきり知ることになる。」

わたしたちは神のこと、イエスのことを今は一部しか知らなくとも、今すでに神は、イエスは、わたしたちのことをはつきり知っていてくださる。すでにわたしたちを知っていてくださる方を、その時わたしたちははつきりと知る。幸せな将来がわたしたちに用意されています。

「13:13 それゆえ、信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る。その中で最も大いなるものは、愛である。」

ところでわたしの属する聖公会は英国（国）教会を母体として世界に広がった教会です。世間では聖公会というと、ヘンリー8世の離婚問題から始まった教会とよく言われます。しかし離婚問題は実は発端に過ぎず、16世紀の英国には大陸と同様、み言葉への渇きがあって、それが宗教改革の実質を形成していったのです。この機会に、イングランドにおける宗教改革の重要な発端となった英語への聖書翻訳者ウィリアム・ティンダル（William Tyndale 1494～1536）司祭のことを少しご紹介したいと思います。

彼は当時の人々の魂の渇きを癒そうとして、原典から聖書を英語に翻訳しました。彼の生涯を紹介したDVDを前に見たことがあります。タイトルは”GOD’S OUTLAW”（神の無法者）。神から遣わされた秩序破りの人間、というくらいの意味でしょうか。彼は当時厳禁されていた聖書翻訳に取り組みました。イングランドは危険なので大陸に渡り、ベルギーで翻訳を続け、彼の英訳聖書が英国に持ち込まれて飛ぶように売れました。しかしやがて彼は逮捕され、火刑となります。

そのDVDの中に、彼の翻訳が印刷されて、1枚1枚紐に掛けられて乾かされているとき、その一部が朗読される場面があります。それがこのコリント前書13章「愛の賛歌」の箇所なのです。その朗読が非常に美しい。聖書が朗読されるだけで聖霊が働き、心が慰められ、平安を与えられる気がします【ここでその朗読を聞く】。願わくはわたしたちの礼拝においても、聖書朗読が、祈りの言葉が、人の力によらず聖霊が働いてくださる時となることを願います。

5. キリストの復活

第一コリントの中心はいま読んで13章だと考える人も多いようです。しかし内容的には15章に記されたイエス・キリストの復活が決定的に重要だとわたしは考えます。

「15:3 最も大切なこととしてわたしがあなたがたに伝えたのは、わたしも受けたものです。すなわち、キリストが、聖書に書いてあるとおりわたしたちの罪のために死んだこと、4 葬られたこと、また、聖書に書いてあるとおり三日目に復活したこと、5 ケファに現れ、その後十二

人に現れたことです。……8 そして最後に、月足らずで生まれたようなわたしにも現れました。」
このあと、パウロはこう言います。

「15:16 死者が復活しないのなら、キリストも復活しなかったはずです。17 そして、キリストが復活しなかったのなら、あなたがたの信仰はむなしく、あなたがたは今もお罪の中にあることになります。」

これは奇妙な言葉だと、わたしは学生時代に思っていました。「死者が復活しないのなら、キリストも復活しなかった」。何のことでしょうか。ある時点で理解が行きました。キリストが復活したのは、人を（つまりわたしたちを）復活させるためだと。イエス・キリストが復活した。それで終わりではないのです。キリストの復活には目的があり、意味がある。それはわたしたちを復活させる、わたしたちを新しい命に生かすことです。わたしたちと無関係にキリストがひとり復活しても意味がない、というのです。

「15:20 しかし、実際、キリストは死者の中から復活し、眠りについた人たちの初穂となりました。21 死が一人の人によって来たのだから、死者の復活も一人の人によって来るのです。22 つまり、アダムによってすべての人が死ぬことになったように、キリストによってすべての人が生かされることになるのです。」

アダムが死んですべての人が死ぬことになった。しかしそれより重要なのは、キリストが復活してすべての人が新しい命に生かされるようになったことです。

パウロの存在と働きにおいては、キリストの十字架の死と復活が常に伴っています。もっと言えば、キリストの十字架と復活が彼の中に食い込んでいます。ここで詳しくパウロの復活理解について説明する余裕はありません。ただ次の言葉に触れておきましょう。

「15:57 わたしたちの主イエス・キリストによってわたしたちに勝利を賜る神に、感謝しよう。58 わたしの愛する兄弟たち、こういうわけですから、動かされないようにしっかり立ち、主の業に常に励みなさい。主に結ばれているならば自分たちの苦労が決して無駄にならないことを、あなたがたは知っているはずです。」

この確信、この励ましの根拠は、イエス・キリストの復活の事実、復活の主の現臨です。

6. おわりに

昨日 1 月 25 日は「使徒聖パウロ回心日」でした。その日の祈りを英語から訳しますと次のようです。「神よ、あなたはあなたの使徒パウロの宣教によって世界中に福音の光を照らされました。どうかわたしたちが彼の驚くべき回心を記憶することをおして、わたしたち自身の感謝をあなたに示すことができますように。……アーメン」

この手紙には「婦人たちは、教会では黙っていなさい」（14:34）というような時代的制約を感じさせるところがあります。しかしそうした制約を抱えつつも、心から主を愛し、教会を愛し、そのゆえに感情をあらわにしてでも、教会が教会であるために率直に訴えざる得なかったパウロの情熱を大切なものとして記憶したいと願います。手紙の締めくくりの言葉です。

「16:24 わたしの愛が、キリスト・イエスにおいてあなたがた一同と共にあるように。」